日本医史学会会報

四三号（復刊）

平成一九年一〇月三〇日

第一〇九回日本医史学会総会を開催するにあたって……会―1
第一〇八回日本医史学会総会印象記……会―2
第一〇八回日本医史学会総会報告……会―6
支部・研究会だより……会―12
雑報・寄贈本リスト……会―20

第一〇九回日本医史学会総会を開催するにあたって

会長　大沢　眞澄

第一〇九回日本医史学会総会および学術大会は二〇〇八年六月に千葉県佐倉市で行われることになりました。順天堂大学の酒井シヅ先生、佐倉順天堂医院の佐藤強先生のご推薦をいただき、その会長に指名されましたのでご挨拶申し上げます。図らずもの大任で、内心忸怩たる思いで一杯のこの頃でございます。

二〇〇七年一一月には長崎大学医学部において西洋医学教育発祥一五〇年記念・長崎大学医学部創立一五〇周年記念式典が挙行され、併行して国際医学史科学史会議、日本医史学会・日本薬史学会・洋学史学会の合同大会も行われました。周知のようにオランダ軍医ポンペ・ファン・メールデルフォールトによる幕府長崎海軍伝習所への着任・活動に関することが中心ですが、その他蘭学に関することなど多くの面が紹介されました。

ポンペ門下の逸材として松本良順・佐藤尚中・司馬凌海・関寛斎らが高名でありますが、彼らは皆佐倉順天堂、佐藤泰然の関係者であります。また海軍伝習所に学び、ポンペの帰国時にオランダ留学のため同道した榎本武揚・赤松則良も泰然の関連者であります。

このようにみますとポンペの長崎から順天堂の佐倉へとい

う大会の流れもきわめて自然に受け取れると思われます。幕末佐倉藩では開国派の藩主堀田正睦公の主導で蘭学が奨励され、藩政の改革、佐藤泰然の招致、順天堂の設立をはじめとして、多くの外国の書物が蒐集されました。それら藩校の書物は現在、千葉県立佐倉高校鹿山文庫（一九九三年、千葉県指定有形文化財。蘭書一七四部三三五冊を含む）として保管されており、中でも『ハルマ和解』、『訳鍵』、『ドゥーフ・ハルマ』、『和蘭字彙』などの字典類や一九世紀中頃を中心とする多くの医学書類が知られております。

現在、鹿山文庫書物の修復が実施されつつあり、医学書では「謨斯篤牛痘篇」、「牛痘新書」、「牛痘種法篇・牛痘種法小論」などが含まれています。洋書類（蘭、仏、独）は総てマイクロフィルム化されております。

鹿山文庫の整備・運営に携わっているものの一人として、本大会の成功を祈ること切なるものがあります。

第一〇八回日本医史学会総会印象記

北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部客員研究員
西巻　明彦

大阪は燃えていた。第一〇八回日本医史学会総会および学術大会は、田中祐尾会長のもと、メインテーマ「庶民の町大阪における医学の軌跡」と題し、平成十九年四月七日・八日、大阪市立大学医学部を中心に開催されました。当日はソメイヨシノが満開。例年より二週間早く八重桜も満開ということで、造幣局通り抜けが行われており、春爛漫の大阪でありました。大阪環状線一〇三系から眺めた大阪城と周囲の桜は眼に焼きつきました。天王寺で下車すると、再開発の進む大阪阿倍野地区は昔日の面影はなく、希望あふれる街へと変貌していたのには驚かされました。会場は、大阪市立大学四階で九時よりスタート、一般演題七七題、特別講演三題、シンポジウム一題、また隣のメディックス六階にある医学資料館では特別展が開催されました。大阪での医史学会総会開催は実に三二年ぶりとのことです。出席者は会員参加延べ四〇〇人、その他一般参加は七〇名とのこと、公開講座が無かったにもかかわらず、驚異的な参加者数でありました。庶民の町大阪の熱気をまざまざと感じさせられました。来賓者も多彩で、七日に酒井國男大阪府医師会長、大島久明大阪市立大医学部同窓会長、八日は西沢良記大阪市大医学部長、また関淳一大阪市長も個人の資格で来訪され華を添えられました。田中祐尾会長は「大阪での医学総会に呼応して大阪市民の大学において大阪の医学を取り上げ、大阪の首長のご臨席を仰ぐ……といった大阪づくめでありました」と述べています。まさにその言葉通りの総会でありました。

会長講演は「近世自家医学遺産の諸分析」と題し、田中祐尾会長自ら大阪八尾東郷村「彌性園」についての論考でありました。初代基則は豊臣秀長に仕え、朝鮮出兵に参加し、武

将としてまた軍医として活躍したといいます。子孫が代々東郷村で日々診療のかたわら文化的ネットワークを広げていった記録は感銘深いものがありました。

特別講演は酒井シヅ氏による「大坂の蘭学　解剖を中心に」で、大坂蘭学を四期に分け、第一期は大坂の学問の特徴である町人学者が活躍した時期、第二期は本格的な蘭学が大坂に根付いた時期、第三期は大坂で特有の人体解剖が行われた時期、第四期は大坂に全国から学徒が集まる蘭学塾が存在する時期に分類しています。第一期、大坂の蘭学は好事家の町人の趣味と旺盛な好奇心から始まり、木村兼葭堂らが活躍し、懐徳堂が大坂の富商達の手で作られ、中井履軒、麻田剛立、山片蟠桃らを輩出しました。第二期は、橋本宗吉、斉藤方策、中天游が大坂蘭学を深め、第三期は解剖が再三行われ、伏屋素狄が活躍し、第四期は緒方洪庵が登場、洋学の時代へと移行していくこととなります。内容が豊富で、的確に事実をまとめられ、大変参考となり、総会の白眉でありました。

シンポジウム「大坂の蘭学史―その背景と展開そして特徴」は、大坂蘭学の真髄を極める有意義なもので、座長の蒲原宏氏の名進行で粛々と進められました。「大坂の蘭学と適塾」の芝哲夫氏は、適塾が自然科学の素地となったことを認めながらも、適塾時代に何故直接創造的科学が生まれなかったのかと課題を与え、浅井允晶氏の「大坂蘭学の実験的・実証的性格」では、町人世界の利潤追求競争世界のもとで、学問も競争社会に組み込まれ、自由な実験的・実証的手法が育まれたということを強調し、古西義麿氏の「大坂の蘭学における大坂の除痘館の役割」では、緒方洪庵らの除痘館が全国各地の分苗を行い近代医学に貢献したことを述べ、小石元紹氏は「大坂蘭学発祥地の背景」で、問重富、小石元俊両名がオランダ語学習のため資金を出して橋本宗吉を大槻玄澤のもとに送り出し、大坂蘭学の基を作ったことを述べました。最後にヴォルフガング・ミヒェル氏は、大消費地である大阪を背景に「人・モノ・情報―医学と医療の近代化から見た大阪について」の中で、明治になり、道修町の中から近代医学の各種器具の国産化に成功したことを指摘、大阪の底力を感じさせるのに充分でありました。同じ学問であっても、東京の学問とは違う自由な気風は羨ましくもあり、学問の発展には一定の雰囲気が必要なことを改めて感じました。

招待講演はジェフリィ・ヘインズ氏の「煙の街から住み心地よき都市へ―関一と近代大阪」であり、通訳は加茂利男大阪市立大学名誉教授が担当されました。医史学会にとって近代の都市問題の講演は異色で、関の功績は住環境の悪化から住み心地良き都市への変革にあたり、医療的立場、つまり治療的・予防的手段を社会的政策として実行した点が興味を引きました。この講演には、関一のお孫さんである前述の関淳一大阪市長が臨席され、聴講されました。今回の総会はまさに大坂の蘭学から始まり、大阪の現代都市政策にまでいきついた実に見事な企画力でした。

大阪上本町蔵鶯庵の永富独嘯庵景徳碑に、安岡正篤氏が

「普語ニ曰く、上医ハ国ヲ医ス、其の次ハ人ヲ救フト。古来医人ヲ敬ヒテ、国手ト称スル所以ナリ。近世名実共ニ国手ノ名二恥ヂザル者ハ、夫レ独嘯庵永富鳳先生力。」と記しています。独嘯庵は、大坂蘭学の初期の功労者で小石元俊を育て、その思想は吉田松陰に影響を及ぼし、維新回天の基礎となりました。これは総会の後に聴いたことですが、関一は大阪市立大学の前身である大坂商科大学を市民の力で創設し、また関一研究は関研究志望の前述のジェフリイ・ヘインズ氏が当時の大阪市立大学の宮本憲一教授を訪ねたことをきっかけに関一研究会が立ち上げられたとのことです。関一研究会により、孫である関淳一氏宅から関一日記が発見され、関研究が大きく前進しました。宮本憲一氏は、関一の大阪市長としての業績について「日本の都市史上、理論と実践を統一した最高の市長」であると述べて、「医学にたとえてみれば、関はすぐれた病理学者であるとともに臨床医であったと思う。病人に直面した臨床医はその病人がどのような階級身分であろうと治療をしなければならない……」と記し、このことから、関一は医師ではありませんが、国手と呼ぶにふさわしい印象を持ちます。

一般演題は七七題に及び、どれも聴いてみたい力作揃いではありましたが、二会場制のため、すべてを聴くことは出来ませんでした。近年、二会場制は当たり前になってきたようですが、かつては一会場が医史学会総会の特徴であり、いささか残念な気も致します。しかし、どちらも一長一短あり、一般演題が増えることは喜ばしいことであり、更に進んで三会場制などという時代もくるのかもしれません。今回特徴的だったこととしては、猪飼祥夫氏の「出土した中国古代医学文物」の展示発表があったことと、「田中彌性園」四〇〇年間の医学遺産の展覧は田中祐尾会長の会長講演と連動した展示で、一次史料の展示と発表を同時進行で進めるという野心的な試みでありました。今後の発表の一形式として定着することを望みます。一般演題の中で、印象に残った発表を記しますが、あくまで個人的な印象記ということでお許し下さい。

会田恵氏の「グラム医師の研究の経過について」は、微生物実習などでグラム染色はポピュラーなものでしたが、そのグラム医師に関する業績と染色工業文化とは密接に関連していると指摘されたことは有意義でありました。坂井建雄氏の「ガレノスとヴェサリウスによる骨の観察」は、ヴェサリウスがガレノスの概念と用語を踏襲しながら、人骨についての観察に基づいた記述をしていると述べられたことは、いつもながら教えられることの多い発表でした。松木明知氏は「脊椎麻酔事故予防に対する医史学的対策とその効果」で、現代社会と医学史の接点で現代医療の歪みに対し正しい方向性を示すことを主張され、寺畑喜朔氏は「杉田玄白所蔵のターヘル、アナトミアの所在」で医史資料保存の難しさを論究され、どちらも考えさせられることが多い演題でした。中村節子氏らの「平野重誠の『玉の卯槌』にみる凶年後の心得と看護」では危機的な世相の中での養生・看護の仕方を論究され、現

代に通じるものを感じさせられ、友部和弘氏らの「垣本鍼源の刺絡」では、鍼源の治療は刺絡を軸としていることを指摘して一石を投じ、「ヴォランタリ・ホスピタルが拓く地平（一）」では柳澤波香氏が、セント・ジョージ病院の歴史を紐解くことで英国医療制度の実態を報告し、日英の違いを改めて認識させられ、石原力氏は「南小柿寧一とその家系（二）一南小柿宗宅」では寧一の影に隠れてはいるが宗宅が優れた蘭学者であることを発掘したことは感銘深いものがありました。小曽戸明子氏は「『南冥問答』にみる「哺」について」で、亀井南冥が病根は小児期の養育にあり、田舎流に育てる事が大切と述べていること医術と学問と道が分かちがたくある指摘は興味深いものでした。その他、天野陽介氏らが「謝観（利恒）と中国医学大辞典」で謝観が地理学者であり医学者であり、中華民国時代の伝統医学を知る上での好書であること、鈴木達彦氏らが「『古今方彙』の各種版本の検討」で時代により内容に相当な改変があること、また小林晶氏は「「オルトペディ」の造語者、ニコラ・アンドリ（一六五八～一七四二）（その一）」で整形外科学のもとの意味である「オルトペディ」について論究された事はいつもながら頭の下がる思いでした。次回（その二）が今から楽しみです。

小曽戸洋氏らによる「田中彌性園の古医書」、町泉寿郎氏らによる「田中彌性園の古文書、書画」は田中祐尾会長の「田中彌性園」を分析・解明すると同時に江戸時代の医学を知る上で貴重な発表でした。

今回の総会は共催展示および記念講演とが杏雨書屋、適塾、除痘館記念資料室、森宮はりきゅうミュージアムの各施設で行われました。また、大阪府医師会、八尾市医師会、大阪市立大学医学部、大阪市立大学医学部同窓会、同腫瘍外科（第一外科）桜澪会の御後援を頂き御礼申し上げます。さらに「大阪医史蹟巡り」「近世河内八尾東郷村田中彌性園医学遺産図録」という貴重な二書が配布されました。このような大規模な総会を成功された田中祐尾会長、長門谷洋治名誉会長、顧問の寺畑喜朔、中山沃、中橋彌光の諸先生方、奥沢康正実行委員長、さらに見事にＩＴを統括された猪飼祥夫、園田真也の両先生及び親切に対応して下さったスタッフの皆様方に改めて感謝の意を表します。

第一〇八回日本医史学会総会

去る平成十九年四月六日に理事・評議員会、七日には総会が大坂市立大学医学部で開催されました。左記の報告が承認され、協議事項は可決されました。第五号議案については理事・評議員会においてＮＰＯ化に向けて進めていくことが決議され、総会では協議を行いませんでした。

一、報告事項

（一）庶務報告

一、平成十八年度会員動静（平成十九年一月三一日現在）

入会者　三八名

退会者　二一名

死亡会員

木村陽二郎（十八年四月三日）

佐藤　達策（十八年四月四日）

荘保忠三郎（十八年五月二五日）

江川　義雄（十八年六月十八日）

川端　利久（十八年十一月二二日）

三輪　卓爾（十八年十二月八日）

中村　輝子（十九年一月二五日）

衣笠　　昭（十九年一月三〇日）

（二月以降の死亡会員）

中井脩太郎（十九年二月五日）

森川　政一（十九年三月二六日）

都合退会者　十三名

十九年一月三一日現在　会員数　八八六

正会員　　八七三

名誉会員　九

賛助会員　四

二、受　　賞

第一〇回日本麻酔科学会社会賞　松木　明知

第一回英国アイルランド麻酔科学会 Charles King賞　松木　明知

（二）平成十八年度事業報告

一、日本医史学雑誌　五二巻二―四号

五三巻一号　発行

二、第一〇七回日本医史学会総会・学術集会

平成十八年五月十三―十四日

会長　川嶌　眞人

於・中津文化会館

第一〇八回日本医史学会総会・学術集会

平成十九年四月七―八日

会長　田中　祐尾

於・大阪市立大学医学部

三、日本医史学会例会　八回開催

（三）平成十八年度共催・協賛事業報告

一、神農祭（協賛）　於 湯島聖堂
　平成十八年十一月二三日

二、第一四回医療文化サロン展（後援）　於・護王会館
　平成十八年十一月一―三日

（四）平成十八年度（一月三一日現在）会計報告（資料一・二・三）

（五）第十九回矢数医史学賞選考結果

看護史研究会編『病家須知』農山漁村文化協会刊行（二〇〇六・九・三〇）

（六）第十三回学術奨励賞選考結果

松木明知「馬場貞由訳『遁花秘訣』写本　十六種の書誌学的研究」（五二巻四号）

（七）日本医史学会支部・研究会報告（資料A）

（八）西洋医学教育発祥百五十年記念三学会合同大会準備状況

（九）その他

二、協議事項

第一号議案　平成十九年度事業計画案

一、第一〇〇回総会記念事業（継続）
　・「日本医史学文献目録」編纂
　・「日本医薬博物著述年表」制作

二、十二月例会五学会合同開催
　日本医史学会・日本薬史学会・日本獣医史学会・日本歯科医史学会・日本看護歴史学会
　十九年十二月八日（土）　於　順天堂大学

三、第五回田原アショッフ・シンポジウム協賛
　於　リル・ドリーム中津
　平成十九年九月二四日

四、神農祭協賛　於　湯島聖堂　平成十九年十一月二三日

第二号議案　平成十九年度予算案に関する件（資料四）

第三号議案　日本医史学会総会選出に関する件

二〇〇八年度総会　佐倉市　会長　佐藤強氏
二〇〇九年度総会　佐賀市

第四号議案　『日本医史学雑誌』編集に関する件（資料五）

第五号議案　NPO設立に関する件

第六号議案　その他

平成１８年度　収支報告書

資料１

自　平成18年4月 1日
至　平成19年1月31日

（収入の部）

科目	予算	決算	増減	備考
1. 会費収入	8,500,000	3,045,250	△5,454,750	～19年1月31日
2. 入会金	100,000	56,000	△44,000	
3. 雑誌売上	100,000	217,500	117,500	ﾊﾞｯｸﾅﾝﾊﾞｰ
4. 著者負担	100,000	230,000	130,000	
5. 広告収入	200,000	95,200	△104,800	
6. 名簿代	0	0	0	
7. 集会費	30,000	32,400	2,400	～19年1月31日
8. 助成金	1,700,000	1,700,000	0	
9. 寄付金	0	650,000	650,000	
10. 利息	0	127	127	
11. 雑収入	50,000	16,940	△33,060	印税他
小計	10,780,000	6,043,417	△4,736,583	19. 1. 31現在
前年度繰越金	1,217,759	1,217,759	0	
合計	11,997,759	7,261,176	△4,736,583	

平成１８年度　収 支 報 告 書

資料２

自　平成18年4月 1日
至　平成19年1月31日

（支　出　の　部）

科　　目	予　　算	決　　算	増　　減	備　　考
1. 学会誌等刊行費	4,500,000	2,635,925	△1,864,075	52巻1-3号分
2. 名 簿 刊 行 費	0	0	0	
3. 事　業　費	2,000,000	1,006,478	△993,522	～19年1月31日
（総　　会）		(717,717)		
（例　　会）		(178,450)		
（矢数医史学賞）		(　4,704)		
（学術奨励賞）		(105,607)		
4. 事　務　費	700,000	77,618	△622,382	～19年1月31日
5. 印　刷　費	80,000	162,200	82,200	〃
6. 備　品　費	100,000	0	△100,000	〃
7. 通　信　費	300,000	158,113	△141,887	〃
8. 人　件　費	1,600,000	1,222,250	△377,750	〃
9. 交　通　費	850,000	541,620	△308,380	〃
10. 渉　外　費	100,000	30,500	△69,500	〃
11. 会　議　費	100,000	62,757	△37,243	〃
12. 雑　　費	10,000	26,880	16,880	〃
13. 予　備　費	1,657,759	0	△1,657,759	
小　　計	11,997,759	5,924,341	△6,073,418	19. 1. 1. 31現在
次年度繰越金	0	1,336,835	1,336,835	19. 1. 1. 31現在
合　　計	11,997,759	7,261,176	△4,736,583	

資料3

資　産（平成19年1月31日現在）

1. 一般会計　1,336,835（現金 112,400　預金 1,224,435）
2. 特別会計　7,049,582
3. 矢数医史学賞基金　5,406,108
4. 斉藤脩基金（日本医史学会学術奨励賞基金）
　　1,500,000

計　15,292,525

内　訳

特別会計

支　出		収　入	
次年度への繰越金	7,049,582	前年度より繰越金	6,980,277
		利息	69,305
合　計	7,049,582	合　計	7,049,582

矢数医史学賞

支　出		収　入	
次年度への繰越金	5,406,108	前年度より繰越金	5,544,275
矢数賞賞金	150,000	利　金	11,833
合　計	5,556,108	合　計	5,556,108

平成18年度一般会計および特別会計について、収支計算書（自　平成18年4月1日　至　平成19年1月31日）その他の書類を監査した結果、正確かつ妥当であることを認めます。

平成19年2月15日

監　事　高橋文

監　事　石原力

資料4

平成19年度　予　算　表

自平成　１９年４月１日－至平成２０年３月３１日

支出の部	前年度(平18)予算	本年度(平19)予算	前年度との比較	備考	収入の部	前年度(平18)予算	本年度(平19)予算	前年度との比較	備考
1.学会誌等刊行費	4,500,000	4,700,000	200,000		1. 会費収入	8,500,000	8,500,000	0	
2.名簿刊行費	0	0	0		2. 入会金	100,000	100,000	0	50名
3.事業費	2,000,000	3,100,000	1,100,000		3. 雑誌売上	100,000	100,000	0	
4.事務費	700,000	700,000	0		4. 著者負担	100,000	200,000	100,000	
5.印刷費	80,000	80,000	0		5. 広告収入	200,000	200,000	0	
6.備品費	100,000	0	△ 100,000		6. 名簿代	0	0	0	
7.通信費	300,000	300,000	0		7. 集会費	30,000	30,000	0	
8.人件費	1,600,000	2,000,000	400,000		8. 助成金	1,700,000	1,400,000	△300,000	学術振興会出版助成金
9.交通費	850,000	1,200,000	350,000		9. 寄付金	0	0	0	
10.渉外費	100,000	100,000	0		10. 利息	0	0	0	
11.会議費	100,000	100,000	0		11. 雑収入	50,000	50,000	0	登録.委託
12.雑　費	10,000	10,000	0		前年度繰越金	1,217,759	3,536,835	2,319,076	
13.予備費	1,657,759	1,826,835	169,076						
合　計	11,997,759	14,116,835	2,119,076		合　計	11,997,759	14,116,835	2,119,076	

（資料A）

平成十八年度支部研究会報告

平成十八年度北海道医史学研究会　報告

○北海道医史学研究会・日本薬史学会北海道支部合同学術集会
　平成十九年一月二十七日（土）午後二時～
　於　北海道医師会会館

開会挨拶
　北海道医史学研究会会長　飯塚　弘志
　日本薬史学会北海道支部支部長　斎藤　元護

一般演題（1）　座長　長瀬　清（北海道医師会副会長）
　一、「戦時中発疹チフスに倒れた根室の医師達」
　　古屋　統（NPO北海道安全衛生研究所）
　二、「ベルツ博士の来道と関場不二彦先生の外遊事情」
　　宮下　舜一（札幌市）
　三、「関場不二彦著『西医学東漸史話』の仮製本について」
　　秦　温信（札幌社会保険総合病院）
　　島田　保久（元町整形外科）

一般演題（2）　座長　斉藤　浩司（北海道医療大学薬学部教授）
　一、「ホシ伊藤の創業者伊藤経作の生涯（1）星一との邂逅」
　　本間　克明（（株）北海道医薬総合研究所）
　二、「ドイツ帝国函館領事L・ハーバーと星一」
　　山　朝江（やま内科胃腸科医院薬）
　　三澤　美和（星薬科大学）
　三、「北海道薬科大学設立胎動期の新事実」
　　吉沢　逸雄（日本薬史学会）
　　中川　收（国史学会）

特別講演　座長　片岡　是充（医療法人讃生会宮の森記念病院理事長）
　「北海道の医療―明治初期の医制・開業免状の推移―」
　　講師　島田　保久
　　（日本医史学会評議員・北海道医史学研究会代表幹事）

閉会挨拶
　北海道薬剤師会副会長　竹内　伸仁

○「北辰第八号」平成十九年三月発行予定
　〒〇六〇―〇〇四二　札幌市中央区大通西六丁目
　　北海道医師会内　北海道医史学研究会（島田保久）

平成十八年度新潟支部　報告

支部所在の日本歯科大学は創立百年を迎え創立記念行事が行われた。

今年度の支部としての例会、研究発表会は行われなかった。支部事務局の所在は前年通り、日本歯科大学新潟生命歯学

部内、医の博物館（〒九五一―八五八〇　新潟市浜浦町一―八　電話〇二五―二六七―一六〇〇）内である。

平成十八年度（二〇〇六年）中の支部会員の学会発表は次の通りであった。

①第九回国際受胎シンポジウム特別講演
二〇〇六年四月二六日　於・新潟大学有壬会館
オギノ・キュウサク・メモリアル・レクチャー
「日独親善につくしたドイツ人病理学者ジグフリード・グレフ博士について」　蒲原　宏

②新潟オランダ協会講演会
二〇〇六年一〇月一三日　於・新潟砂山会館
特別講演「オランダ医学と新潟―三人のオランダ医学教師の軌跡」　蒲原　宏

③第一〇七回日本医史学会総会発表
特別講演「日本整形外科の歴史と田代家」　蒲原　宏
シンポジウム「日本の歯科免許第一号者　小幡英之介」　樋口　輝雄
一般口演「『傷寒金鏡録』の思想について」　西巻　明彦

④第三四回日本歯科医史学会総会発表
一般講演
『病草紙』の条文に関する考察　西巻　明彦
『古今著聞集』と『病草紙』　西巻　明彦
『口歯類要』にみられる口瘡治験例の一考察　西巻　明彦
アメニティマップにみられる歴史的文化遺産の快適性　西巻　明彦
『傷寒金鏡録』の舌診図に関する研究　西巻　明彦
金匱要略と舌診図についての考察　西巻　明彦
鷗外と歯科医史（一）陸軍一等軍医　森林太郎の「齲歯予防論」　樋口　輝雄
鷗外と歯科医史（二）森林太郎の勉学ノート「語彙材料」にみられる歯科記述　樋口　輝雄

⑤日本整形外科学会八十年史　分担執筆　担当　蒲原　宏

⑥整形外科の歴史　イギリス篇　整形看護連載　蒲原　宏

などがある。

〒九五一―八五八〇　新潟市浜浦町一―八
日本歯科大学新潟生命歯学部　医の博物館内
日本医史学会新潟支部（蒲原　宏）
電　話　〇二五―二六七―一六〇〇
ＦＡＸ　〇二五―二六七―一一三四

平成十八年度北陸医史学同好会　報告

例会記録

北陸医史学同好会（日本医史学会北陸支部）の第二八回例会は、平成十八年七月九日（日）福井県医師会講堂において開催された。

本会において発表された演題は左記の如くである。

一、資料・大井玄洞に関する生涯と功績　寺畑　喜朔（富山県）
二、ふたたび長崎蓬洲の年譜について―史料『先考蓬洲行状』を中心に―　正橋　剛二（富山県）
三、庄内医学会会報　第百八十四号について　佐藤　允男（山形県）
四、扁額「金沢病院」（三条実美書）について　赤祖父一知（石川県）
五、「御陣屋剤籍」―門屋泰安信善　莇　昭三（石川県）
六、壮猶館、卯辰山養生所医学館の医学書　板垣　英治（石川県）
七、金沢市立図書館蔵『中津バスタード辞書』について　泉　彪之助（石川県）

特別講演
「結核死亡率よりみた福井・金沢両市の性格の差」　白崎昭一郎（福井県）

各種の結核死亡率統計には、その地の産業や人口構成などが色濃く反映している。福井市は最初高い結核死亡率として出発したが、次第にその値を低めていった。これは福井市が最初機業に深く依存し、のちにその機業場を周辺に拡張していったためである。金沢市は機業以外に金属工業、機械製造業、窯業、印刷製本業など結核と関連する産業を有しており、しかも周辺からそれを吸収して、人口を増加させていったから、その結核死亡率はむしろ増加していったのである。

〒九一〇―〇〇〇一
福井市大願寺三丁目四―一〇　福井県医師会館内
北陸医史学同好会・日本医史学会北陸支部（白崎昭一郎）

平成十八年度神奈川地方会　報告

活動報告（平成十八年一月一日～十二月三十一日）

▽大会
一、平成十八年度総会並びに第二十八回学術大会（二月二十五日）
於・神奈川県救急医療中央情報センター

〔特別講演〕
病名に名を残した医師　原　正道

〔一般口演〕
一、ヨロケと紫金錠　中西　淳朗
二、森林太郎（鴎外）の脚気問題と遺書　荒井　保男

二、日本医史学会九月例会・神奈川地方会第二十九回学術大会合同会（九月十六日）
於・神奈川県救急医療中央情報センター

〔一般口演〕
一、成人ＴＴ細胞白血病（ＡＴＬ）を巡る研究者たち　佐分利保男
二、黒死病はペストだったのか　滝上　正

〔特別講演〕
精神医療史の光と影　山田　和夫

▽幹事会
・五月十九日、十月二十日に開催し、学術大会等について協議した。
▽その他
・神奈川地方会だより第十五号と会員名簿を作製し、七月に会員に配布した。
・大島智夫氏が平成十八年春の叙勲で瑞宝中綬章を授与された。

〒二三一―〇〇二一　横浜市中区日本大通五八
日本大通ビル　神奈川県予防医学協会内
日本医史学会神奈川地方会（杉田暉道）

平成十八年度東海支部　報告

活動報告

一、名古屋医史談話会例会（東海支部主催）
於・愛知県医師会館
第三十九回例会「医学史からみた東洋と西洋」（平成十八年八月五日）　加藤　恭之
二、名古屋医史談話会会報第三十七号を発行
三、伊藤圭介日記（第十二集）出版記念会（東海支部後援）
於・名古屋市東山植物園
（平成十八年十一月十九日午後一時～四時）

【記念講演】
「伊藤圭介翁の遺品保存に関する体験」　伊藤　昭
「伊藤圭介と千村家関係者」　杉村　啓治
「吉雄常三の『和蘭草木譜』について」　土井　康弘
「『竄篤児薬性論』と伊藤圭介・飯沼慾齋」　遠藤　正治
「小野職愨『公私雑記』について」　膝館寿巳恵

〒四六六―八五六〇　名古屋市昭和区鶴舞町六五番地
名古屋大学大学院医学系研究科医療管理情報学教室
日本医史学会東海支部（山内一信・高橋　昭）

平成十八年度関西支部　活動報告

活動報告

（一）日本医史学会関西支部二〇〇六年春季大会（京都医学史研究会と共催）
平成十八年六月四日（日）　於・京大会館
一般演題
一、ＴＴ・シデナム　再考　栗本 宗治（大阪医大）
サー・ゴードン・ロブスン（ロンドン大学）
二、「長沙走馬楼三国呉簡・竹簡」にみる疾病名について（二）　猪飼　祥夫（大津市）
三、豊臣秀長の都状（病気祈祷文）と病状　永島福太郎（奈良市）

○亥口　勝彦（大和郡山市）
四、林　子平の死因　杉浦　守邦（大津市）
五、「実地看護法」にみる看護管理の状況　上坂　良子（和歌山医大）
六、杉立義一先生と溝上家・阿蘭陀外科免許状　飯塚　修三（西宮市）
七、適塾門下生「別府琴松」について　松田　俊悟（元山陽新聞社）
○木村　丹（岡山県早島町）
八、緒方洪庵の津山藩医野上玄博宛て分苗免状をめぐって　浅井　允晶（奈良市）
九、京大整形外科伊藤弘教授の業績　廣谷　速人（京都市）
十、田中彌性園収蔵外科免許状と紅毛流外科の普及について　ヴォルフガング・ミヒェル（九州大学）
十一、美作の医師芳村杏斎の大坂華岡塾入門　中山　沃（西宮市）
十二、宮内庁所蔵の医学写真について　寺畑　喜朔（高岡市）

誌上発表
麦角菌と冬虫夏草の歴史　奥沢　康正（京都市）
田村　哲二（京都市）
「Life and Light for Woman」に記された京都看病婦学校／同志社病院の活動経緯　小野　尚香（豊中市）
「二十世紀精神病理学史」（渡辺哲夫）をよむ　小曽戸明子（八王子市）

特別講演
一、「ベルツの日記」再考―ベルツ博士を今に学ぶ　山上　勝久（大阪府）
二、蘭学―京都と北陸　正橋　剛二（富山市）

▽二〇〇六年度秋季大会は第一〇八回日本医史学会総会の準備作業のためお休みとし二〇〇七年度春季大会は同総会が大阪で開催されるため、支部大会が総会に融合されますので、単独の春季大会としての開催はありませんでした。

▽支部機関誌『医譚』
八四号発行　平成十八年六月二十日
八五号（第一〇八回日本医史学会総会記念号）
平成十八年十二月二五日
なお二〇〇七年四月七・八両日の第一〇八回総会ご参加の全員にこの八五号記念号を配布しました。

〒五八一―〇〇〇三　八尾市本町五丁目一―七
田中医院内　日本医史学会関西支部
事務局長　田中祐尾
（電　話　〇七二―九二二―二〇二八）
（FAX　〇七二―九九三―一二三七）

平成十八年度京都医学史研究会　活動報告

▽機関紙『啓廸』第二十四号発刊
杉立義一先生追悼特集
追悼文および掲載論文　三点　五八頁
追悼文　北小路博央、坂部慶夫、末中哲夫、杉浦守邦、高島文一、田中祐尾、長門谷洋治、中西淳朗、中野　進、八木淳夫、猪飼祥夫、正橋剛二、藤田俊夫、友吉唯夫、奥沢康正、中島美恵子、三宅宗純、半井英江
「医学天正記」（七）　高島　文一
竹岡友仙「半百録」について　八木　聖弥
近松門左衛門の死因　杉浦　守邦

▽第二一一回例会　平成十八年六月四日　於・京大会館
日本医史学会関西支部春季大会と共催
一般演題　十二
内　京都医学史研究会会員発表
四　林　子平の死因　杉浦　守邦
十二　京大整形外科伊藤弘教授の業績　廣谷　速人
特別演題
Ⅰ「ベルツの日記」再考―ベルツ博士を今に学ぶ　山上　勝久
Ⅱ　蘭学―京都と北陸　正橋　剛二
紙上発表　三
内　京都医学史研究会会員発表
麦角菌と冬虫夏草の歴史　奥沢　康正・田村　哲二

▽第二一二回例会　平成十八年十月五日
於・京都府医師会館（京都府医師会と共催）
「狂言『かみなり』を読む」
奈良大学文学部国文学科教授　柳田　征司

▽第二一三回例会　平成一八年十月七・八日
「伊賀・伊勢・安乗医史跡めぐり」（高橋陽一先生企画）
山田赤十字病院・院長室、鳥羽伊良子清白詩碑、清白安乗ノ稚児詩碑、講演　京都産業大学教授　伊勢市国際交流協会会長　岩本　忠「伊勢の四方山話」、橋本策博士生誕地訪問（伊賀市歴史資料館・橋本策博士胸像・生家跡の記念碑）
参加者　八名

▽第二一四回例会　平成十九年一月七日　於・京都国際ホテル
「昭和初期　一移民の手紙による生活史」
京都四条病院　中野　進
新年懇親会

▽第二一五回例会　平成十九年三月一日
於・京都府医師会館（京都府医師会と共催）
「日はまた昇る―臓器移植の軌跡―」
先端医療振興財団先端医療センター　日本移植学会理事長　田中　紘一

▽第十四回医療文化史サロン展
平成十八年十一月一日～三日　於・護王会館

▽その他　平成十九年三月十一日

府医師会を代表して京都医学史研究会五人が「盟親」の山脇東洋観臓記念碑に献花（建碑から三十一周年）、いで誓願寺墓地内山脇東洋夫妻の墓・山脇社中解剖供養碑に供花した。

〒六〇四―八五八五
京都市中京区御前通松原下ル　京都府医師会館内
京都医学史研究会　会長　中橋彌光

平成十八年度広島支部　活動報告

活動報告

日本医史学会広島支部総会・学術集会

平成十八年九月十六日（土）午後一時～

於・広島大学病院大会議室

一、日本医史学会広島支部総会

一、日本医史学会広島支部研究発表会

各務文献の木骨と『各骨真形図』広島大学　片岡　勝子

華岡青洲が全身麻酔に用いた薬草　広島大学　神田　博史

『旧約聖書』にみられる解剖学者　広島国際大学　隅田　寛

日清・日露戦争期の呉海軍病院の活動　広島国際大学　千田　武志

一、特別講演会

「永井潜の倫理観」について　安佐医師会長　桑原　正彦

〒七三一―八五五一　広島市南区霞一丁目二―三
広島大学医学部医学資料館内
日本医史学会広島支部（片岡勝子）

平成十八年度福岡地方会　活動報告

平成十八年は福岡会は大分県中津市で行われた第一〇七回日本医史学会総会参加の関係もあり開催を見送った。私は同会の招待講演の「向笠弘次と精神病治療の歴史」演者は鈴木二郎東邦大学名誉教授の座長をつとめさせて頂いた。向笠先生は日本人としては二人（そのうちの一人は日米二重国籍のため純粋の日本人は向笠氏のみ）しかいない国際ロータリー（世界一六八カ国、クラブ数三二、五九六、会員数一、二二一、〇八二人―二〇〇六年度）の会長を一年間つとめられ世界各国のクラブを歴訪され、英語での講演やスピーチを行い超多忙な予定をリウマチを患われたときには車椅子を使いながら行脚された。一方本業の精神科医としても統合失調症（分裂症）に対する電気ショック療法を日本に初めて導入し普及に努められ従来は手つかずで鉄格子隔離や座敷牢に放置されていた統合失調症の内服薬を開発導入されるなどの偉大

な業績の報告があった。未亡人はひっそりと中津市で生活されている由である。

また私ども福岡地方会は役員の交代で福岡県医報（福岡県医師会雑誌―月刊）に郷土のほこりと云う題で福岡県の先賢医師の事蹟を連載している。平成一八年十二月号で百十八回となり、約十年の間毎月連載を欠かさず福岡県医報の名物となっている。例えば十月号は北里柴三郎の級友、恩師、ライバル、東大初代衛生学教授緒方正規―木村専太郎などである。

第十五回日本医史学会福岡地方会

平成十九年二月二十四日（土）午後二時～四時
於・アクロス福岡（天神県庁跡）七〇二号室

演題

神農本草経上品の不老長寿の世界　原　敬二郎
熊本古城医学校同級生について（緒方正規、北里柴三郎、濱田玄達）　木村専太郎
パリ病院博物館の紹介　佐藤　裕
適塾の塾頭松下元芳の系図について
―福澤諭吉の一代前の塾頭で親友の筑後久留米藩医―　中山　茂春
『杉田玄白探訪』を出版して　高橋　伸明
向井元升と西洋医術について　ヴォルフガング・ミヒェル

〒八一五―〇〇四二福岡市南区若久一―二八―五
日本医史学会福岡地方会
原クリニック（原　敬二郎）
電　話　〇九二―五五七―二五七八
FAX　〇九二―五五七―二六三五

雑　報

寄贈本リスト

（単行本）

喜多医師会百年史編纂委員会『大洲医史　喜多医師会百年』二〇〇六

中村光夫『埼玉の種痘神』二〇〇六

中村光夫『八丈島と種痘』二〇〇六

『錦窠翁日記（明治九年八月～十二月）』日本医療総合研究所『医療百論二〇〇七』二〇〇七

ヴォルフガング・ミヒェル『村上玄水資料Ⅰ』「中津市歴史民俗資料館分館　村上医家史料館」二〇〇三

ヴォルフガング・ミヒェル、遠藤次郎、中村輝子『村上医家史料館蔵の薬箱及びランビキについて』「中津市歴史民俗資料館分館　村上医家史料館」二〇〇七

ヴォルフガング・ミヒェル（編）『中津市歴史民俗資料館分館　医家史料館叢書Ⅵ』「中津市歴史民俗資料館分館　医家史料館」二〇〇七

山口拓史『第八高等学校―新制名古屋大学の包括学校①―』「名古屋大学大学文書資料室」二〇〇七

『名古屋大学　大学文書資料室　保存資料目録　第七集』「名古屋大学大学文書資料室」二〇〇七

大星光史『古代日本の生命倫理と疾病観』「思文閣出版」二〇〇五

『江戸時代の西洋学』「天理図書館」二〇〇五

（別　刷）

『済生館の洋学史的研究』小形利彦「南部郷土史講座　第四回」

『「大坂の除痘館」分苗所調査報告（一―二）』古西善麿「適塾」（三八―三九）

『近年におけるKraepelin研究：“Edition Emil Kraepelin”（2000–2006）をめぐって』濱中淑彦「精神医学」四十八（十二）

『「モーツアルトの脳」―モーツアルト生誕二五〇年裏話（前・後編）―』濱中淑彦「名古屋医報」（一三〇四―一三〇五）

『金沢市立図書館蔵『中津バスタード辞書』について』泉彪之助「北陸医史」二八（一）

『上州館林藩における牛痘種痘の受け入れと長澤理玄―漢方的世界からの脱却を模索して―』古西善麿「「脱」の世界」

『「健康」の語誌的研究』青木純一、北野与一「東横学園女子短期大学紀要」（四一）

『天保五年当時の華岡家「春林軒」における医学修業の実態について（一）―大森泰輔（不明堂三楽）の塾中日記「三遊雑記一・二」の翻刻―』梶谷光弘「古代文化研究」（十五）

（雑　誌）

『あいみっく』二七（合併号三）、二八（三）「国際医学情報センター」
『BIBLIA』（一二六―一二七）「天理図書館」
『Chinese Medical Journal』一一九（二〇―二四）、一二〇（一―一六）「Chinese Medical Association」
『福井県医師会だより』（五四五―五五六）「福井県医師会」
『いわちどり（小笠医師会誌）』（三四）「小笠医師会」
『医道の日本』六五（一一―一二）、六六（一―一〇）「医道の日本社」
『漢方の臨床』五三（一一―一二）、五四（一―一〇）「東亜医学協会」
『神奈川県医学会雑誌』三四（一）「神奈川県医師会」
『啓迪』（二五）「京都医学史研究会」
『明治薬科大学研究紀要』（三六）「明治薬科大学」
『名古屋大学史紀要』（一五）「名古屋医史談話会」
『日本医師会雑誌』一三五（八―一二）、一三六（一―七）「日本医師会」
『日本歯科医史学會々誌』二七（二）「日本歯科医史学会」
『日本獣医史学雑誌』（四四）「日本獣医史学会」
『だより（練馬区医師会）』（四六三―四七五）「練馬区医師会」
『労働科学』八二（三―四）、八三（一）「労働科学研究所」
『労働の科学』六二（一―一二）、六三（一―一〇）「労働科学研究所」
『STETHOSCOPE』（一八六―一八九）「日本医学切手の会会報」
『東医学研究』（一二二―一二四）「東医学研究会」
『慾斎研究会だより』（一一〇―一一三）「慾斎研究会」
『漢方と鍼』三一（一―三）「北里研究所東洋医学総合研究所だより」
『Medical Postgraduate』四五（一―三）「医学書房」
『斯文会々報』五七「斯文会」
『斯文』（一一五）「斯文会」
『Journal of Anesthesia』二一（Suppl.）「Japan Society of Anesthesiologists」
『JMAJ』四九（九―一二）、五〇（一―三）「Japan Medical Association」
『醫譚』八五―八六「日本医史学会関西支部」